

家族屋

〈登場人物〉

松本修平（43歳）

伸子（39歳）

美紀（13歳）

和彦（6歳）

久恵（74歳）

石川智子（42歳）

1

舞台、暗い。かすかな明かりの中で、女が桐の小箱を開ける。小箱の中には綿に包まれた何かがある。大事そうに、そつと取り出す女（智子）。

女

な、何、これ！ 違う、違うじゃない。これは、ただの毛糸。赤い毛糸のきれっぱしじゃない！

暗転。

2

松本家の居間兼事務所。修平と伸子は事務所スペースの椅子に座っている。久恵は二人から離れた居間で編み物に熱中している。

修平 和彦、遅いな。

伸子 渋滞、じゃないですか。

修平 えっ？

伸子 渋滞ですよ、あのへんは夕方いつも混

むんですよ。おまけに連休なんだし。

修平 そうだよなあ…：連休なんてはずして

くれればいいのに。わざわざ、人出の多い

ときに出かけるなんてさ。

伸子 それがいいんですよ。なるべく人出の

多いところが。混んでいる場所へ出かけ、

アトラクションの順番を何時間も待って、

帰りは渋滞につかまって、疲れ果てて帰る

のがいいんですよ、あの人たちには。

修平 そんなもんかね。

伸子 そんなものなんですよ。

修平 和彦、ずっとだろ。

伸子 ええ、このところ毎週。

修平 疲れてるんじゃないか。

伸子 飽きたって。

修平 飽きるだろうな、毎週じゃ。

伸子 ガイドだってできますよ。でも、そん

な素振り、見せちゃいけないから。

修平 初めて来たような顔しなきゃならんか

らな。あいつもたいへんだ。

伸子 写真もたくさん。

修平 おい、いつだったか。和彦の頭のそこ

ろに霊が写っていたっていう、あれ。

伸子 ああ、河本さんでしょ。テレビの心霊

番組に応募したいけどいいか、なんて言っ

てくるんだから。

修平 おいおい。

伸子 もちろん、ことわりましたよ。冗談じ

やないわ。テレビになんか出されたら、商

売にならないわ。

修平 それで結局、どうだったんだ？

伸子 何が？

修平 霊だよ、ほんものなのか。

伸子 いやだ。あんなの、ほんもののわけないじゃない。

修平 背後霊とかいうのがいるんだろ。先祖の霊で。

伸子 ああいうのは、そう思い込んで見るから、そんなふうに見えてくるんですよ。壁のしみだって、人の顔だと思って見ていると、だんだん人の顔に見えてくるんです。

修平 そうか。

伸子 そうですよ。

久恵（唐突に話に加わる）おじいさんがね。

修平（驚いて）な、なんですか、急に。

久恵 おじいさんが、ときどきあらわれるんですよ。

修平 おじいさん？ 夢の中に、でしょ。

久恵 夢じゃないですよ。窓に映ったり、廊下を横切ったりするんです。「あら、おじいさん」って私がいさつすると、すっと消えてしまうの。

修平 かあさん、やめてくださいよ。気持ち悪い。（伸子に）ぼけてきたのかな？

伸子 聞こえてるわよ。

修平 聞こえないよ。

伸子 聞こえてるの、全部。聞こえないふりしてるだけ。

修平 そうかなあ。

伸子 耳、少しは遠くなったようだけど。聞こえてるの、ちゃんと。

久恵 ねえ、和ちゃんの写真のことだけど。それ、おじいさんじゃないかしら。

修平 和彦の？

伸子 心霊写真のことよ。

修平 ああ……なんだ。

久恵 おじいさんが写ってたんじゃない？

伸子 違いますよ。

久恵 私が見ればわかるわ。

伸子（強い調子で）だから違うんですよ！

久恵 ……わかるのに。

伸子 違うんです。

修平 そんなにムキにならなくても。

伸子 だって……。

久恵、また編み物にとりかかる。

修平 この頃、かあさん、仕事ないのか？

伸子 ありませんよ。世の中、年寄りばかり

なんですから。

修平 外へ出ないから、余計あななるんだ。

伸子 結婚式なんか、たまに頼まれることは

あるけれど、覚えられないんです。

修平 覚えられないって、スピーチするわけ

じゃないだろ。

伸子 名前ですよ。前の結婚式のごつちや

になつて。この間も、お嫁さん、あけみさ

んつていうんだけど。ずつと、しのぶちゃ

ん、しのぶちゃんつて言い続けて。「来て

もらつても何にもならない」って皮肉言わ

れちゃつたわよ。

修平 そうか。しかし、少しぼけた感じもリ

ァリティがあつていいじゃないか。

伸子 何、それ？

修平 ほんとらしく見えるじゃないか。

伸子 そうかしら。

修平 そうだよ。

伸子 でも、どうするの。ほんとに、ぼけち

やつたら。

修平 どうするって、そりゃ。

伸子 ……私、いやですからね。

修平 いやって……そんなこと言われても。

伸子 私、そんなつもりで、一緒になつたわ

けじゃないし。

修平 そんな、おれだって、そんなつもりじゃなかったが。

伸子 なかったが……何？

修平 なかったが、なかったけれど、そりゃあ、ちよつと、なんだと思うわけだ。

伸子 どう思うわけ？

修平 かあさん、いまではそんなでもないけれど、十年くらい前まではずいぶん人気があつたじゃないか。〃親孝行、したいときには親は無し〃の連中からの引き合いがすごかつたじゃないか。

伸子 成金とかヤクザみたいな、あやしいのが多かつたわ。

修平 日本の母って感じなんだよ。結構、助かつたんだぜ、家計的にも。

伸子 なら、あなた、めんどろみればいいじゃない。

修平 おれは、おれのできるせいっぱいのことをするよ。

伸子 何よ、もってまわつたような言い方。つまり、できないことはやらないってことでしょ。それは、やらないって言うのと同じなのよ。

修平 同じじゃない。人間、誰だって、できることしかできない。できないことなんてできない。

伸子 何、言つてんの。じゃあ、そのできること、できないことつてのは誰が決めるのよ？ お役所で決めてくれるの。違うでしょ。あなたでしょ。あなたが、できない、無理だつて決めるのよ。

修平 そうさ。

伸子 それは初めからできない。やらないって言つてると同じだつて。

修平 ……やるよ。

伸子 え？

修平 やるって言ってるんだ。

伸子 やるの？

修平 ああ、おまえはやらなくていい。

伸子 やらないわよ。

修平 ああ、いいき。でも、おれはやる。

伸子 どうして。

修平 どうしてって、そりゃ。

伸子 どうしてよ。

修平 どうしてって、あたりまえだろ。かぞ

…。

久恵 ねえ、伸子さん。やっぱり、おじいさんじゃないかしら。

伸子、無視。

久恵（しよげる）見せてくれれば、わかるのに。

修平 おい。

伸子 何です。

修平 見せてやれよ、写真。

伸子 あなた、おじいさん、知ってるの？

修平 知るわけないだろ。かあさん、最初からひとりだったんだから…：なあ、写真見れば気がすむんだから、見せてやれよ。

伸子 和彦に聞かなきゃ。

修平 勝手に出したって文句言わないよ。

伸子 どこにあるか、わからないんですよ。和彦のアルバム、何冊あると思ってるんです。本棚でおさまらず、押し入れにもいっぱい。あの人たちったら、一度にフィルム5本や6本はあたりまえに使っちゃうんですよ。そいつをこんな小包みで（手で大きさを示す）送ってくるんだから…：結婚式のアルバムみたいな立派なやつや御大層な額に入れたのまであるし。

修平 整理すればいいじゃないか。

伸子 捨てろってこと。縁起悪くない？

修平 そりゃ、まあ。

伸子 帰ったら聞いたときますよ。和彦なら、どこにあるかわかるから。

修平 なあ、その、背後霊みたいなやつって

和彦の写真にはよく出るのか？

伸子 さあ。

修平 たくさんあるんだから、さがせば他にもあるんじゃないか？

伸子 そうですかねえ。

修平 それが似たようなものだったら、それは、そういう可能性もあるじゃないか。

伸子 霊、なんですか。

修平 おれも詳しく知らんが、そういうものの可能性もあるってことだろ。

伸子 和彦の先祖の霊なんですか？

修平 先祖というより、その、もっと近くの何か、その、和彦を守って……。

伸子 悪霊ってのもいるんですよ。全部が全部、良い霊じゃない。とりついて悪さをする霊もいるって。

修平 そうか……。

伸子 真剣にならないでよ。さっきから言ってるでしょ。和彦のはそういうのと違うって。

修平 おまえ、そう言いきれなのか。

伸子 だって……。

修平 和彦はそういうタチかも知れん。

伸子 タチ？

修平 憑きやすいタチってのがあった。

伸子 馬鹿みたい。

修平 おれたち、和彦のこと、どれだけ知ってるんだ。せいぜい……。

美紀、入ってくる。中学の制服。

修平 おお、お帰り。

美紀、顔も向けず、そのまま部屋の奥に消える。

修平 ただいまぐらい……。

伸子 しょうがないんですよ。反抗期なんだから。

修平 だんだんひどくなってこないか。

伸子 大丈夫ですよ。そういう時期なんですから。

修平 おれと目もあわせない。すぐ顔をそむける。どうなってんだ。

伸子 普通ですよ。

修平 普通かね。

伸子 学校にはちゃんと行ってるし。先生から注意されたこともないし。成績も中くらいだし。人をイジメているようなこともないようだし。

修平 イジメられてるってことはないのか？

伸子 あの子がですか？

修平 そうだよ。

伸子 まさか。

修平 よく、自殺するまで追いつめられていたのに、親はまったく気がつかなかったなんて話があるじゃないか。

伸子 ないですよ。

修平 おまえさ。さっきから、和彦のことも美紀のことでも、ずいぶん自信があるようだけど、体のあざとか、つねられた跡とか、ちゃんとチェックしてるんだろうな。

風呂、一緒に入ってるのか？

伸子 一緒にお風呂に入らなくてもわかりますよ、そのくらい。母親なんですから。

修平 ふーん。

伸子 母親じゃないですか。違うんですか？

少なくも……。

修平 わかった、わかった。

伸子 大丈夫ですよ……それより、いまはイジメてる方がたいへんなですよ。相手の親から訴えられたりするんだから。損害賠償だってあるし。

修平 イジメも金がからむ世の中か。

伸子 ひきこもりなんてのもありますしね。

修平 学校へ行かないってやつか。

伸子 家にずっといるんですよ。学校へも行かず、働きもせず、ずっと。

修平 ずっとか？

伸子 ずっとですよ。

修平 何をしてるんだい？

伸子 家にいるんですよ。

修平 ただ家にいるだけかい？

伸子 そりゃあ、テレビ見たり、本を読んだり。オタクっていうんですか、マニアっていうんですか。要するに、ひたすら趣味みたいなことしてるんですよ。

修平 へえ、そいつは優雅だね。隠居じじいだ。結構な身分だ。それで、まわりは放っておくのか？

伸子 しかたないみたいですよ。無理に連れ出そうとしても暴れるようだし。

修平 それで、ずっと放っておくのかい。働きもしないやつを親がずっとめんどろみて飼っておくんだ。

伸子 飼うだなんて。

修平 そういうことだろ。

伸子 そりゃ、まあ。

修平 具合が悪いわけじゃないんだろ。

伸子 体の具合が悪くなくても、心に問題あるんじゃないの。

修平 心？ 心なんて、どんな人間だって問題あるんだよ。みんな、みんな、問題持っ

てるんだ。それでも学校にも行くし、働きにも行く。巢ごもりだか、ひきこもりだか知らんが、そんなの冗談じゃない！ そりゃ、親が達者で経済力があればいいだろうさ。だが、親はいつか歳をとるし、病気になるし、ぼけるし、やがて死んじまう。金だっていつか無くなる。いつまでもあると思うな親と金だ。そうなったら、その巢ごもりはどうするんだ。そうなって始めて穴蔵から出てくるのか？ へっ、そんなふやけた冬眠野郎に、自分の食い扶持を稼ぐなんてできないさ。まともにやってたつてすぐ舐になる世の中だぞ。誰も使ってなんてくれるもんか。

伸子 あなたが心配しなくても、家族とか親戚とか、まわりがなんとかしますよ。

修平 一人っ子だったら？ 親戚なんて薄情なもんだろ。

伸子 もういいじゃないですか。うちの美紀や和彦がそうだっていうわけじゃないし。

馬鹿みたい、興奮して。

修平 美紀のは普通の反抗期なんだろ。そのうち治るんだな？

伸子 治りますよ。

修平 それより美紀は、ほら、あれで割と美人だから、そっちの方が心配だな。

伸子 そっちって？

修平 そっちって言えば、決まってるじゃないか。あれだよ、男だ、男。

伸子 美紀、まだ中学1年ですよ。

修平 中1だって、おまえ、今頃の子供はすごいんだ。おれらの頃のように長閑じゃない。くだらん情報が氾濫してるせいで。

伸子 そういう子もいるようだけど。

修平 妊娠でもされたら。

伸子 どうしてそこまで飛躍するの。

修平 飛躍っていうが、美紀だって、その、
生物学的には、そういうことが可能な、つ
まり、準備がその……。

伸子、笑う。

修平 尻だって、立派なもんだ。

伸子 いやらしいわねえ。

修平 だから、そういう可能性のことを言っ
てるんだ。ある日、いきなり……。

久恵 できたわ！

修平 かあさん、何です、いきなり！

久恵 できたの、美紀のが。

修平 み、美紀のが。

久恵 ほら、（セーターを示す）できた。

修平 まぎらわしい。

久恵（伸子に）どう？ 年寄りのセンスだか
ら……美紀ちゃん、着てくれるかしら。

伸子 かあさん。

久恵 サイズは大丈夫なはずよ。

伸子 いいですよ、とても。

修平 これから暑くなるっていうのに、セー
ターですか。

伸子 みんなのもつくってるのよ。

修平 おれのもか？

伸子 そう、全員の。

修平 美紀は最近、仕事、少ないのか？

伸子 小学校三、四年くらいまではすごかつ
たのね。

修平 ああ、すごい人気だったな。お正月、
雛祭り、五月の連休、お盆休み、お彼岸、
クリスマス。

伸子 結婚式、お葬式、病院、老人ホーム、
同窓会、運動会。

修平 一日に三件、四件かけもちなんてのも
珍しくなかった。

伸子 私なんて、まるでステージママだったわ。

修平 よく、やってくれたよ。

伸子 そうね。

修平 美紀は写真、どうしてるんだ？

伸子、捨てる仕草。

修平 全部か？

伸子 全部。

修平 一枚も残さず？

伸子 送ってきても見もしませんでしたよ。

そのまま、ポイツ。

修平 そうか……。

伸子 あのくらの歳になつてしまうと、私たちだって扱いづらいんだから……お客もわかつてるから、わざわざ頼みませんよ。

修平 客に危ないやつも多いしな。

伸子 そう。一緒にお風呂に入りたいなんてのが必ずいるの。

修平 何年前だったかなあ、おれが美紀と風呂に入つたの。

伸子 いやだ、何、言つてんの。

修平 もう、やりたくないんだろうか。

伸子 お風呂ですか？

修平 仕事さ。

伸子 いろんなことにいくわすでしょ。感受性が豊かな時期だもの……去年だったかしら、子供が死んだことがどうしても受け入れられず、少しおかしくなった奥さんのところへ行ったの。ご主人に頼まれて。

修平 その子、美紀に似てたのか？

伸子 全然。でも、その奥さん、子供が戻ってきたと言つて美紀を抱きしめて離さないんだつて。美紀も仕事だから我慢してたんでしよう。でもね、そのうち奥さん、何を

思ったか、胸をはだけて美紀におっぱいを吸わせようとしたの。亡くなった女の子、赤ん坊じゃないのよ。美紀と同じ歳よ。なのに、こうして（乳を与える仕草）……さすがに、美紀も逃れようとしたの。するとね、急に奥さん、わめきだしたんだって。「これは、うちの子じゃない。うちの子はどこ？ あんた、誰なの？」そう言って美紀の髪をひっぱって……。

修平 ……。

伸子 鬼の形相ってやつで。

修平 鬼か……哀れだな。

伸子 かと思えば、二十年間、喧嘩別れしていた父親が危篤なので、かけつけるについてお借りできないかなんてのもあったわ。

修平 何だい、そりゃ？

伸子 孫が必要だったの。

修平 孫を見せてやろうっていうのか？

伸子 そんなやさしい気持ちからじゃないのよ。喧嘩別れするくらいで、親子はひどく憎みあっていたのよ。でもね、孫は別ですよ。孫は可愛いものなのよ。

修平 わざわざ、孫をあつらえようってのは……そうか、遺産か。

伸子 憎い子供なんかに分けてやりたくないけど、可愛い孫には何か遺してやりたいと思うものなの。

修平 詐欺の片棒だな。

伸子 詐欺じゃないわ。正当な相続権のある人なんだし。ただ、遺留分だけでなく、少しでも余計にほしいのよ。

修平 なるほど。

伸子 魂胆がわかったから、美紀、頭にきてね。本番でぶちまけてやるつもりだったらしい。

修平 おいおい。

伸子 でもね、涙流して喜んでいるおじいさんの顔を見たら、何も言えなかったって。
修平 そうか。

久恵、また声をかける。

久恵 ねえ、美紀ちゃんなんだけど。

修平 なんですか、また？

久恵 エ又よね？

修平 何が？

久恵 イヌ……サルよ。

修平 犬と猿がどうしたんです。

久恵 そうじゃなくて、A B Cよ。

伸子 イニシャルでしょ。

修平 なんだ。美紀は、エムですよ。

久恵 エ又でいいのよね。

修平 エ又じゃないですよ、エムですよ。エ

ム。エム、ムです。A、B、C、D、E、

F、G、H、I、J、K、Lときて、Mで

Nなんです。

久恵 お隣同士じゃない。

修平 隣って……。

久恵 そんなに違うの？

修平 違いますよ。エ又はこうだし（空中に

描く）、エムはこう。

久恵 何とかならないかしら。

修平 なりませんよ。

久恵 ……編みなおさなきや。

修平 編みなおすんですか？

久恵 だって、エムなんですよ。

修平 美紀、気にしませんよ。

久恵 気にするわよ、名前なんだから。

伸子、セーターを見る。

伸子 おかあさん、それ、エムじゃない。

修平も確かめる。

修平　なんだ、エムじゃないか。それでいいんです。エムはこうだって（空中に描く）言っただけでしょ

久恵　あら、これが、エム？　まあ、よかった。ほんとに。

修平　おれはエスですよ。こういうやつ。

修平、Sの字を空中に描いてみせるが、久恵、見ていない。
少年（和彦）と中年の女（石川智子）が入ってくる。

和彦　ただいま。

修平　おお、お帰り。

智子　遅くなりました。

伸子　混んだんでしょ、車。

智子　ええ、まあ。

和彦、大きな包みを持っている。ミッキーマウスの人形。智子、事務所のソファに腰掛ける。

修平　何だ、その大きいのは？

和彦　買ったもの。

修平（智子に）すみませんね。（和彦に）

さあ、部屋行って、着替えて。

和彦　うん。

和彦、奥の部屋へ。伸子、お茶を出す。

伸子　楽しんで、いただけました？

智子　……ええ、はい。

伸子　今日はお天気がよかったから。

智子 あ の ……。

修平 あまり、楽しめなかったんじゃ。

智子 いえ、そんなことないですわ。スペー
ス・マウンテンとかいうのが、和彦ちゃん
気に入ったらしくて、二回も乗っちゃいま
した。ただ私、もうそんなに若くないから
少し疲れちゃって。ダメですね。和彦ちゃ
ん、「大丈夫、少し休む？」なんて言っ
てくれて。かえって気をつかわせちゃった
みたいで…：やさしい子ですね。

修平 そうですか。

智子 ほんとうにやさしい子。あ の ……それ
で。

伸子 ああ、延長料金のことですね。（時計
を見ながら）二時間半のオーバーですが、
二時間分で結構ですよ。

智子 一時間で…：。

伸子 千円です。二時間で二千元。

智子 あ の ……。

伸子 延長については、契約のときお伝えし
たと思うんですが…：。

智子、お茶を飲む。

智子 一時間千円ということは、十時間では
一万円ということですね。

伸子 ええ…：。

智子 一日二十四時間なら二万四千元。

伸子 そうですね。

智子 一週間なら十六万八千元。一か月、三
十一日なら七十四万四千元。一年、三百六
十五日なら八百七十六万円。十年ならば八
千七百…：。

伸子 あ の 、何を…：。

智子 延長料金をお払いすれば、よろしいん
でしようか？

伸子　ですから、延長は二千円で。

智子　和彦ちゃん、今日一日、本当に楽しそうでした。私もこんな楽しい休日、何年も過ごしたことがなかった。足も腰も痛くなつたけど全然平気。こんな幸せ、こんな充実感、ずっとなかった。私、学校を出てから馬鹿みたいに働くばかりの人生だった。男と張り合つて、できる女だ、キャリアウーマンなどと言われて。それなりの収入もポジションも得たけれど、結局……。

伸子　（さえぎつて）あの……。

智子　和彦ちゃん、養子なんですつてね。

伸子　は？

智子　上のお嬢さんも、そうなんですよ？
美紀さん。

伸子　どこでお調べになつたんですか？

智子　興信所で。

伸子　じゃあ、お尋ねになることもないじゃないですか。

智子　気分、悪くされた？

伸子　いいえ。

智子　気分を悪くされたでしょうね。でもね私、あなたの気分を悪くするつもりはなかったんです。もしそうだったら、あやまりますわ。

伸子　いえ、結構です。

智子　延長したいんです。

修平　あの……和彦のことを気に入っていただいたのはありますが、あの子、明日も予約が入っていますし、その……。

智子　和彦ちゃんのこと、ずっと延長したいんです。ずっと、ずっとです。十年でも、二十年でも。お金なら、あります。私、あまり使うこともなかったから、貯金もそれなりにありますし。親が財産を結構残してくれましたし。

伸子 十年って！ あなた、和彦を。
智子 和彦ちゃん、くださいませんか？
伸子 何、言ってるんですか！ 和彦は売り物じゃないわ。

智子 一時間千円、なんでしょ？

伸子 それは……。

修平 出演料ですよ、和彦はタレントみたいなものだから。

伸子 そうよ、出演料よ。

智子 いくらなら、いいんですか？

伸子 そういうことじゃ、ないわよ。

智子 なら、どういうことなの？ 和彦ちゃんがあなたたちの実子じゃないから、私にくれと言ってるんじゃないの。あなたたちにいいように使われ、稼がされている和彦ちゃんが不憫なのよ。何十回来たかわからないデイズニールンドを連れ回されても、生まれて初めて来たかのように喜んでみせる。わずか六歳の子供にそんなことをしているなんて……。いいえ、同情だけじゃない。私、わかったの。和彦ちゃん、ほんといい子。だから、私、あの子が……。
伸子 あ、の、延長料金、いいですから。お帰りください。

智子 客にお帰りくださいはないでしょ。

伸子 もう、お客じゃないです。

智子 そう、だったら来週も予約するわ。

伸子 おことわりします。

智子 ことわる？

伸子 おことわりします。

智子 おことわり、されません。

伸子、無視する。

智子 渋滞で遅れたなんて、うそ。ずっと迷っていたの。このまま和彦ちゃん、連れて

帰っちゃおうかって。

伸子 連れて帰る！ あんた、それ、誘拐よ
犯罪よ、わかってるの！

智子 わかってるわよ。私ね、お茶の水、出
てるのよ。お茶の水って知ってる？ 国立
大学、女の東大。その私が、あんたごとき
田舎の商業高校出にどうして「誘拐よ、犯
罪よ、わかってるの？」なんて、言われな
きゃならないの！

修平 あの……。

智子 何よ。

修平 確かに、和彦は私どもの実子ではあり
ません。しかし、養子としてちゃんと戸籍
にも入っています。ですから、私どもの子
供なんです。それをほしの、買いたい
と言われても困るわけで、お茶の水を出
方ならよくわかっていただけのかと。

智子 私ね、驚いたわ。ほんとに、こんな商
売があるなんてね。結婚式に呼ぶ親戚の数
が釣り合わないの、エキストラを頼むな
んて話は聞いたことがあった。いかにも見
栄っぱりの日本人が考えそうな……でも、
本物の家族屋がいるなんて思わなかった。

修平 家族屋……私どもは便利屋、もしくは
なんでも屋とは呼ばれていますが、家族屋
などとは。

智子 家族を派遣するのだから、家族屋でい
いじゃない。あなたも父親役として頼まれ
るんですよ。父の日には十件もかけもちす
るっていうじゃない。息子役もするのよね
え。高齢化社会だから、ニーズも高いわけ
だ。ババア殺しって言われてるんですよ。
しわくちやの手を握って、曲がった背中
でもさすって、ついでに年金やなけなしの預
金をかすめとってるんじゃないの？

修平 し、失礼な！

智子（伸子に）　じゃあ、あんたは母の日が忙しいのか。集まったカーネーションを花屋に卸してるんじゃないの？　子供、生んだこともないのに、うまいんだってねえ。庶民的というか、その貧乏らしいところがいいんだろうねえ。まあ、上流階級の奥様役は絶対に無理だろうから。

伸子　あんた、私たちのことまで細々と。

智子　調べたわよ。興信所を使ったって言っただでしょ。こんな厚い報告書を出してくれたわよ。いくら、かかったと思う？　まったく、冗談じゃない。

伸子　わかった。

修平　何だ？

伸子（修平に）　和彦の写真に写ってた、あれ、興信所の探偵だったのよ。

智子　違うわ。それは、私。

伸子　あんた？　一体、どういうつもり！
智子　どういうつもりもクソもないわ。事前調査よ。準備よ、予習よ。私は何をするにもきっちりやるの。きっちり。だから、お茶の水なの。わかる？

修平　あなたが、和彦の背後霊の正体だったんですか？

智子　何、それ？

久恵　背後霊がどうしたの？

智子、突然の久恵の登場に驚く。

久恵　和ちゃんの、あれ、やっぱりおじいさんだったんでしょ。

伸子　かあさん、違いますよ。この人だったんです。この人、和彦のこと付け回していたの。

智子　付け回してなんかいないわよ。

伸子　付け回していたじゃない！

久恵 おじいさんじゃないの？

智子 この人のことも報告書にあつたわ。やつぱり、なんの血のつながりもないんですよ。かあさんなんて呼んでるけれど、（伸子に）あんたの母親じゃないし（修平に）あんたの母親でもない。

久恵（智子を指し）　こちら、おじいさんのお知り合い？

智子 ある日、あなたたちと暮らし始めた。そして仕事も手伝うようになった。どんな経緯までかは書いてなかったけど、どうせいかかわしい理由に決まってるわ。（突然ヒステリックに）くさいのよ、くさい、くさい、くさい。あんたたち、みんな、うさんくさいったりやありやしない！

伸子 ええ、くさくて悪かったわね。他人のことをこそそこそ嗅ぎ回って、何だったの？あなた、何の権利があつてそんなことするの。私たちがどんな家族だって、あんたに関係ないでしょ。何か迷惑でもかけた？

智子 雑誌に載ってる健康器具や健康食品、ダイエット法に幸運を呼ぶペンダント、審査なしのローン。インチキだとは思ってても気になってしまう。お茶の水を優秀な成績で卒業した冷静で、客観的で、論理的で、きわめて理性的なこの私でさえ、『二十年間恋人がいなかったのに、素敵な人に出会え、いまはラブラブ。最高に幸せです』なんてセンスのかけらもない、下品なコピーに惑わされて水晶のお守りを買ったわ。

伸子 ふんっ。

智子 あんたたちの商売のこと知ったとき、私、腹が立った。インチキ商法やインチキローンと同じで、人の弱いところをついてくる。なんて悪どい連中だと思ったわ。許せない。調べあげて消費者センターにでも

告発してやろうと思った……でも、それがまちがいだった。興信所の報告書の中に、和彦ちゃんの写真があったの。可愛い和彦ちゃんの写真が……それで和彦ちゃんが仕事に出るとき、あとをつけた。子供のない夫婦が、孫のいない老夫婦が、和彦ちゃんと楽しそうにしていた。なのに私は、この私は、すぐ後ろで、帽子を目深に濃いサングラスかけて……ああ私も、私も一緒に、和彦ちゃんと一緒に。和彦ちゃんと……たまらなくなっちゃったわ。もう、この気持ちをおさえられなくなったの。

伸子 けっ、お茶の水だか、田んぼの水だか知らないけど。キャリアだかマリアだか知らないけど。あんた、ただの、ただの、さびしいハイミスの中年女じゃないの。えらそうに。スカートよ、そういうのスカートっていうのよ！

智子 ストーカーでしょ。

伸子 どっちでもいいわよ。

智子 ねえ、私、和彦ちゃんといたいの。和彦ちゃんが、ほしいの。和彦ちゃんが。ねえ、ねえ。（伸子にまとわりつく）

伸子 ちよっと、さわらないで！

修平 あ、石川さん……その……結婚したらいいいじゃないですか。結婚がいやなら、養子をもらえばいい。あなたのような、お金があつて、身元がしっかりしてる人ならきつと任せてもらえますよ。

智子 和彦ちゃんできゃ、ダメなの！ 和彦ちゃんがいいの！

美紀、奥の部屋から現われる。

美紀 うるさいわよ！ 何をキーキー騒いでるの。こっちは来週から期末試験なんだか

ら、少しは気を使って！

修平 ああ、すまん。

智子（美紀に）いやな子。

美紀（修平に）誰？　このおばさん。

智子 おば：：客に向かつていう言葉？

伸子 あんたなんか、客じゃない！

智子（伸子を見無視して）いやな子。自分が可愛いことを充分承知していて、それをめいっぱい利用するタイプ。可愛くない子の努力をせせら笑い、人生のおいしいところだけつまんでいくタイプ：：なんて、いやな子だろ。

美紀 おばさん、頭がおかしいの？

智子 おかしくなんてない！　このおばさんは、頭だけはいいんだからね。

修平 お茶の水だそうだ。

美紀 へー。

智子 知ってるの？

美紀 神田の隣でしょ。どうでもいいけど、静かにしてくれない？

智子 あんたの小さい頃の写真、見たわ。洗剤のコマーシャルに出てくるような、可愛くて、健康そうで、天使のような子供：：私は大嫌いだけど：：そんな、あんたがどうしてこんなところにいるのかしらね？　もっと、そう、もっとまともな、金持ちで上品で、インテリジェントな夫婦にだってもらわれたでしょうに。よりもよって、こんな連中のところに？

美紀 余計なお世話。

智子 そう、余計なお世話。何度も言うけれど、私はあんたのような子供が大嫌い。でも和彦ちゃんは別。和彦ちゃんとあんたとは違う。だから、だから私が救ってあげるの。この私が。

伸子（智子に）　あなたの妄想にいつまでも

つきあっている。帰って！

智子 帰るわ。でも一人では帰らない。和彦ちゃんも一緒。和彦ちゃん、来年、小学校でしょ。私ね、実はもうランドセルも買っている。牛革の三越で一番高いやつ。四万五千円もしたわ。いえ、値段なんてどうでもいいの。和彦ちゃんがほしいのなら、テレビゲームでも天体望遠鏡でも、何でも買ってあげる。

伸子 和彦はうちの子よ！

智子 うちの子？ いっぱしの母親みたいな口きかないで。あなた、知ってる？ 和彦ちゃんの目、近視よ。おかしいなって思わなかった？

伸子 ……美紀、そうなの？

美紀 ちよっと見えにくそうだけど。

智子 乱視も混じってるわ。そんなことも気づかないで、母親面して……無理ないか、本当の母親じゃないものね。

美紀 なんなの、この人？ 和彦のストーリーカー？ 警察に電話したら。

智子 警察？ 警察だって？ ああ、おもしろい。電話しなさいよ。困るのはあんたたちじゃないの。いい、あんたたちが和彦ちゃんにしているのは犯罪よ。児童福祉法違反なの。虐待なのよ。訴えてやる。ええ、こうなったら訴えてやるわ。小学校にもあがらない、いたいけな幼児を散々こきつかって金を稼がせている鬼畜夫婦。現代版、越後獅子。マスコミが喜ぶわよ。新聞、雑誌、ワイドショーも来るわよ。蠅みたいなリポーターどもがあんたたちを追いかけるの。さびしい現代人の心につけこむ悪徳商売……人権団体だって黙っていないわ。福祉事務所も調査にくる。（美紀に）そうしたら、おい、おまえも施設に行くんだ。

ざまあみろ。こんな、インチキ家族、バラバラにしてやる。家族屋なんて商売、二度とできなくしてやる！

美紀 言いたいののはそれだけ？ いいわよ、やってみたら？

智子 ただの脅しだと思ってるの？ 私は、あんたたちのこと、あんたたちの商売のこと、何もかも調べつくしたのよ。

美紀 調べつくした？ そう。じゃあ、私がどうしてここへもらわれてきたのか、言っ
てごらんなさいよ。

智子、報告書を取り出す。

智子 言ってあげるわよ。あんたはね、小川一夫、房子の長女として生まれる。が、一歳の頃、父親が交通事故で死亡。翌年、今度は母親が蜘蛛膜下出血で死亡。母方の祖母に預けられる。三歳の頃、祖母が肝硬変で死亡。五歳の頃、祖父が死亡。以上。

美紀 ずいぶん簡単ね。

智子 こんなので充分でしょ。つまりあんたは、身内が次々亡くなって。それで、この連中に引き取られたんだ。（修平と伸子に向かって）可愛い顔してたから、商売に使えると思った。そんなところでしょ？

伸子 あんたね。

美紀 じいちゃんはどうして死んだか、書いてないの？

智子（報告書を見る） ないけど……そんなの、年寄りなんだから。いろいろ不具合はあるのよ。

美紀 私、覚えてる。あの頃、いつもじいちゃんと一緒にのおふとんで寝てただけど、夜、ときどきお腹をおさえて痛い、痛いって。ずいぶん、悪かったんだと思う。

癌だったんだ。でも、私を残して病院なんかいけないから我慢してたんだ。

智子 ああ、そう。

美紀 私、一生懸命、じいちゃんのおなかなでてあげた。こうやって……じいちゃんがどこかへいつちやわないようにって。父さんも、母さんも、私、よく覚えてない。ばあちゃんもすぐにどこかへいつちやったし。このまま、じいちゃんもどこかへいつちやうかもしれないと思うと、ひとりぼっちになるかと思うと、こわくて、こわくてたまらなかった。

智子、小馬鹿にした顔。

美紀 ある時、じいちゃんと歩いていると、そばを親子連れが通ったの。男の子がお母さんとお父さんと手をつないでいた。ときどきブランコみたいにぶらさがって、ぶらーん、ぶらーん。じいちゃん、それを見てこういったの。「美紀、おまえもあれをやってほしいんじゃない。ごめんよ、じいちゃん、もう力がないし、それにあれは二人いないとできないなあ」って。私、きつたらやましそうな顔で見ていたんだ。それから、二週間ぐらいたった頃……。

修平（美紀の祖父になりきって） 孫の両親のかわりをしてやってくれませんか。なにほんの二時間ばかり、一緒に散歩をしてやってくださればいい。

伸子 それだけで、よろしいんですか？

修平 ただ、そのとき手をつないでやってほしいんじゃない。

伸子 はい。

修平 それから、ときどき持ちあげて、ぶらーんぶらーんと。

伸子　ぶらーんぶらーん、ですか？
修平　そう、ブランコのようにな。

修平と伸子、美紀の手をつなぐ。

美紀　知らないおじさんとおばさんと手をつないで歩いた。おじさんの手は熱くて、べたべたしていた。おばさんの手は冷たかった。私は、なんだか気持ちが悪くてその手を離れたかった。けれど、じいちゃんがうれしそうにしていたので、我慢していた：しばらくしたら、二人が私をぐいっと持ちあげた。私の手がこんなになって（持ちあげられる仕草）：私はゆれた。ぶらーんぶらーんと、ブランコのように。右手も左手もしっかりとしっかりとつかんで、私を持ちあげてくれた。ぶらーんぶらーん。私のつまさは地上をはなれた。わずか数センチだったろうが、私は空高く飛び上がったように思えた。

伸子　私たちは、桜並木の堤防を散歩しました。何も話すわけでなく、手をつなぎ、ときどき、約束のぶらーんぶらーんをやってあげました。

美紀　おじいちゃんは向こう岸の木の根元に座って、ずっと私を見守っていた。ときどき手をふってくれた。

修平　約束の二時間がたって、私たちが老人のところへいくと、老人は木にもたれて眠っていました。

美紀　おじいちゃん、ありがとう。おじいちゃん：おじいちゃん？　おじいちゃん、起きて。起きて：起きて、起きて！

しやがみこみ、顔を覆う美紀。

修平 それから美紀は私たちといいます。ずっと

智子 ……それで、それがどうしたの。そんな細かいことなんていいのよ。ただ、あなたたちは、そういうふうに、安直にくっついてできた家族だってことじゃない。

久恵、いつのまにか智子の後ろに。

久恵 やっぱり背後霊がいたの？

智子（驚いて）な、何よっ！

久恵 ねえ、美紀ちゃん。今、おじいちゃんのことってなかった？ あんたにも、おじいちゃんの霊がついているの？

伸子 かあさん。

美紀 ええ、おばあちゃん。じいちゃん、いつも私の傍にいます。

久恵 そう、よかったわね。ああ、おばあちゃんね、おまえのイヌ、サル……。

伸子 イニシャル。

久恵 それをまちがっちゃったの。こういうのを、こういうのにしちゃったの。それでなおそうと思うんだけど、すぐたいへんなんです。

伸子 おかあさん、まちがってないって言うたでしょ。

美紀 いいよ、おばあちゃん、それでいい。

智子（報告書を見ながら） このばあさんはどこから連れてきたの。

伸子 ある日、来たのよ。玄関に入るなり、「ただいま」って。それからずっと。

智子 それからずっと。

伸子 ずっと。

智子 あきれたものね。

美紀 和彦のことは？

智子 もちろん、知ってるわよ。和彦ちゃん

は、デパートに捨てられていたんでしょ。
かわいそうな子。でも、三越でしょ。さすがに和彦ちゃんだわ、スーパーに毛が生えたような三流百貨店じゃない。一流デパートだもの、銀座四丁目の。

美紀 見つけたのは、私。

智子 あんたが銀座の三越に何の用？ 万引きでもしてたの。

美紀 トイレでね、泣いてたの。でも、誰もかまってあげないの。赤ん坊が一人で泣いてるのにな。それで私、待ってたの。

智子 待ってた？ トイレで？ 馬鹿じゃないの、この子。さっさと、デパートの店員とか、大人を呼べばいいじゃないの。

美紀 待っていたかも知れないじゃない、ママが来るのを。だから私、つきあってあげたのよ。指をしゃぶらせてやるとね、すごく喜んで。

智子 あんたその指、トイレのあとにちゃんと洗ったんでしょね。

美紀 二時間待ったわ。

智子 つくづく暇な子ね。（伸子に）いつもこうなの？

美紀 それでも来なかった。

智子 来ないわよ、普通。それで、警察経由で施設に預けられたんでしょ。

美紀 六か月たってもママはあらわれなかった。だから、私が受け取りにいった。

智子 受け取りって：ちよつと、拾得物じゃないのよ、和彦ちゃんは！ あんたたち一体どういうつもりなの。あんたたちが和彦ちゃんを引き取ったりしなかったら。

伸子 しなかったら？

智子 もっと、もっとまともな家に引き取られていたわよ。だって、あんなに可愛いんだもの。引く手あまたよ。

伸子 あんた、そればかり。子供はペットじゃないのよ。

智子 どこに引き取られたって、ここよりまし。こんな、偽物の家族の一員になって、家族屋なんて、人の弱味につけこむような商売をさせられることはなかったわよ。

伸子 人の弱味って、何よ。

智子 そうじゃない。人の心の弱いところにとりいってお金を稼いでる。恥ずかしくないの、人間として。

伸子 頼まれるからやってるの。押し売りしてるわけじゃない。

修平 石川さん、あなた、いま偽物の家族っておっしゃいましたね。

智子 そうじゃない。違う？

修平 たしかに、私どもは血のつながりはない。あなたのおっしゃるように、いつかどうか一緒にいる。一緒に暮らすようになったきっかけなんて、いい加減なものかもしれない。：それではおうかがいするが、あなたは独り身のようにですが、親も兄弟もいらしたんでしょう？

智子 いるわよ。

修平 その家族は、本物の家族でしたか？

智子 本物よ、ちゃんと血もつながって。

修平 本物の家族でしたか？

智子 あたりまえじゃない。

修平 あなたを守り、あなたを慰め、あなたを励まし、あなたと悲しみ、あなたと喜ぶ。：：そんな家族でしたか？

智子、言葉につまる。

修平 あなたと、どんなに離れていても、たとえ死んでしまっただけでも、どこかでつながっている家族でしたか？

智子、答えない。

修平 私たちは、寄せ集めの偽の家族です。絆などない。でもね、だからこそ、こんな私たちだから、家族に憧れ、家族を欲しがる人の気持ちがわかる。真似事であっても家族と過ごす時間を体験してみたいという人の気持ちがわかる。それは虚しいことだとわかっていても……マツチ売りの少女が売り物のマツチをすって見た幻、たしかそれは、クリスマスの家族の団欒だった。

智子 あんたたち、あんたたちって……おかしいわ。おかしい、おかしいわよ、変よ。異常よ！許されていいわけないわ、あんたたちみたいな商売も、いいえ、あんたたちみたいな存在、そのものが。

和彦、奥の部屋から現われる。

智子 和彦ちゃん。

和彦、美紀の後ろに隠れる。

智子 和彦ちゃん、おばちゃんのところに来ない？ねっ、おいで。

和彦 ……ぼくね、自分でできるよ。

智子 えっ？

和彦 ぼくね、来年は小学校なんだよ。だから、おしっこなんて自分でできる。

美紀 おばさん、トイレで和彦のオチンチンズボンから出してあげたんだった。

智子（動揺）そ、それは……。

伸子 あらあら。

修平 ほお。

一斉に笑い出す修平、伸子、美紀、和彦。そして久恵も。

智子 うるさい、うるさい、うるさい！

智子のわめき声。それをかき消すような一家の笑い声。
暗転。

3

舞台、1場と同じ。薄暗い。

智子 あんなので、よかったでしょうか？

久恵 はい、上出来でしたよ。さすが役者さんね。

智子、久恵から封筒を受け取る。智子、中身をちらつと見る。お金のようだ。

智子 あの……どうして？

久恵 わからない？

智子 ええ。

久恵 家族というものはね、植物と同じ。ときどき水をやらないとね、ダメになっってしまうの。どんな家族でも。

久恵、退場。残った智子、もう一度、封筒を確認する。中に、赤い毛糸の端が見える。それを引き出そうとすると、なぜか途切れない。封筒の中からどんどん出てくる毛糸。

智子 何よ、これ？ 毛糸？ 毛糸じゃないわ。毛糸なんかじゃない！

智子にからみつく毛糸。絶叫。
暗転。

4

東京デイズニールランドのテーマソング、
大ボリュームで。
舞台には、久恵の編んだ赤い色のセーターを着た、修平、伸子、美紀、和彦が並ぶ。それぞれにインシャルがくつきりについている。スーパールのちらし広告の家族モデルのように様々なポーズをとる四人。なかなかさまになっている。
同じセーターを着た久恵、紙袋から赤い毛糸の玉を出し、舞台に転がしたり、客席に投げる。たいして大きくない紙袋からまるで手品のようにきりがなく出てくる毛糸玉。
やがて舞台も客席も、赤い糸の蜘蛛の巣を
はりめぐらせたようになる。

了